


 コラム  
Column

ポル・キロ

清水 純一

ポル・キロとはポルトガル語で「kg 当り」という意味である。実はこれは近年急速にブラジル全土に広がった量り売りという形態のレストランの愛称である。私も 1998 年から 3 年間ブラジルに赴任していた際には随分お世話になった。ポル・キロではその名の通りお客は自分の食べた量だけお金を払えばよく、肉だけ 1kg 食べようが茹でたジャガイモだけ 1kg 食べようが代金は同じである。日本人から見ると野菜も肉も同じ値段とはちょっと考えられないシステムであるが、少量づつ色々な種類のものが食べられるので栄養のバランスも取れるし、何より小食な私は大食漢のブラジル人より安く払えば良いので合理的なシステムとも言える。ただし私が好きなジャガイモやニンジンが重いのでステーキだけ食べるブラジル人よりも重量が多くなる場合もあるので油断はできない。私はだいたい 4 百 g 前後が多かったが同僚の日系人は大体 6 百から多いときで 7 百 g 食べていた。なかには 1kg 以上という猛者もいる。値段は kg 当り日本円にして 5 百円くらいだからかなり安く食べられる。ただし、昼専門の店が多く、夜やっている店はあまり見たことがない。

飲み物とデザートは大概別料金である。飲み物はオレンジジュース、コーラ、ガラナ等を頼んでいる人が多い。ガラナというのはブラジルの国民的清涼飲料水で、アマゾン原産の葡萄性低木の果の種を乾燥させて煎り、水と混ぜてペースト状にすり潰して固めたものである。アマゾンのマーケットにはこのチョコレート色した棒状の物が売っており、川魚の舌を乾燥させた物をおろし金代わりにして摩り下ろし、水と砂糖を加えて飲むようになっている。ガラナは昔からインディオの間で不老不死、強壮剤、媚薬として珍重されてきており、今では日本でも通信販売で怪しい絵がついたパッケージで売られているようである。私もアマゾンで棒と「おろし金」のセットを買ってきて自宅に所蔵しているがまだ試していないので効能の程はわから

ない。ただしブラジル人が昼食時に飲んでいるのはこのように濃いものではなくエキスを炭酸水に溶かして大量生産されているものなので大分効き目は薄まっていると推察される。

余談になるが子供の頃育った北海道には「函館コアップガラナ」というガラナ飲料があって私もたまに飲んでた。高校を卒業し、見事予備校に合格、青雲の志を抱いて上京した際、予備校の仲間にガラナの話をしたら誰も知らず田舎者扱いされて憤慨した思い出がある。北海道は僻地であるかもしれないが田舎ではない。しかし、あの北海道のガラナはどういう経緯でブラジルから伝わったのであろうか。

話を戻すとブラジル人は余程量り売りが好きらしく近所の洗濯屋にはシーツ kg 幾らの表示があったし、一度愚妻と南部の繊維産業が盛んな地域に観光に行った時、ガイドにタオルしか置いていない土産物屋に連れて行かれたことがあるがそこにも大きな秤があり、やはり量り売りであった。

ところで、ブラジルの内陸には面積 2 億 ha 以上にもなるセラードと呼ばれる地域がある。もともとこの土壌は酸性度が強く農耕には不適とされていたが 1970 年代に入ってから土壌改良により急激な農業開発が進んできている。首都ブラジリアの郊外には農牧研究公社のセラード研究所があり、昨年出張したおり、所長からセラードにおける食料生産の可能性に関する試算の説明を受ける機会があった。それによれば、セラードには 1 億 2 千 7 百万 ha の耕作可能面積があり、この土地を全て耕作した場合、年間で穀物 2 億 3 千 6 百万トン、食肉 1 千百万トン、果物 1 億 5 百万トン、合計 3 億 5 千 2 百万トンが生産可能であり、5 億人の人口を養えるとのことである。話を聞いていて穀物と肉と果物を重さで単純に合計するなんて若干乱暴な計算だなと思い、後でその感想を同行していた畜産草地研究所の青木室長に述べたところ、これはポル・キロレストランの発想と同じではないかと指摘され、成る程と思った。量り売りの昼食に慣れているブラジル人にとってはこの計算も自然な発想なのかもしれない。

だがこの 5 億人という数字、一人人がいくら食べるという前提なのだろう。電卓をたたくと 1 人当り 1 日約 2kg 弱で 1 食では約 640g となり、だいたいブラジル人の胃袋に合わせた計算にあう。平均的日本人の胃袋で計算したら、養える人数はかなり増えそうである。いずれにしても今後の世界の食料需給を考えるうえでセラードからは目が離せそうもない。